

語と観念とテキスト

—「オネーギン」の〈至福〉

藤田智子

トゥイニャーノフは「詩的言語とは何か」で、「厳密に言えば、「語」という抽象概念はその語が組み入れられる語彙体系と個々のことばがおかれた状況に応じて、そのたびごとに新たに満たされるうつわのようなものである。語は、さまざまな語彙体系と機能体系という異なった体系の交差する場所なのである。(1)」ととらえ、「リズムをもった詩行は、語義の基本的及び二次的特徴、それに揺れ動く特徴の出現に独特な影響を及ぼす諸条件の完全な体系である。(2)」と述べた。語とテキストのこの把握は全く正しい。確かにわれわれは詩を読む時、無意識に、前後関係からある語の複数の語義のうち一つを選んで残りの語義を無視したり、音の響きやリズムやからさまざまな感触を受け取ったりしている。仮にこの無意識的操作によって理解していることを分析的に説明するなら、おそらく大量の文言が必要だろう。だが詩は分析的説明を行わない。詩は語義の特徴やテキストの諸条件を総合し、層にして内包する。すなわち語もテキストも、その場その場で相互に影響しあう層の多層構造なのである。

トゥイニャーノフは、語の無に当たりて器の用有る側面を強調し、諸条件から語義の特徴への影響という一方向での分析に専念した。しかし語は基本的語義を切り離しがたく持ち、必ずある観念を代表する。そして周囲からはたらきかけられるだけでなく、周囲にはたらきかけもする。本稿では、この認識を前提に「エヴゲーニー・オネーギン」中の блаженный と блаженство をとりあげ、諸条件から語義の特徴への影響および語義の特徴から諸条件への影響という二方向をとり、〈至福〉の観念がテキストにどのように入り込んでいるかを見る。

ソ連アカデミー版ロシア語辞典(4巻)とプーシキン辞典の両者とも блаженный の語義を二つに分けており、説明もおおむね等しい。第一は「さいわいな」、第二は「ユローディヴィ」である。(3) まず第一の語義をめぐる。プーシキン辞典の打ち出す「かき乱されない(4)」というニュアンスが次の例で優勢になる。(5)

- 1) Но, шумом бала утомленный
И утро в полночь обратя,
Спокойно спит в тени блаженной
Забав и роскоши дитя.

(1-36, 1~4)

歓楽と奢侈の子とはオネーギンである。ここで утомленный および спокойно спит がそれぞれ блаженной と影響しあっている。まず前者が блаженной と押韻されていることに注目しよう。押韻において音的つながりと観念のつながりが支えあっていることは、今さら言うまでもない。ただ、その支えあいは時として制約になる。たとえばある韻を持つ語が少ししかない場合、押韻するためにはその中から語を選ばなくてはならず自由な連

想ができない。その点プーシキン時代において -ённый は被動形動詞の接尾辞+語尾でもあってこの韻を持つ語は非常に多く、その中から自由な連想に基づいてこの語は選ばれることができた。ということはつまり、疲れはこのコンテキストの中で〈至福〉の観念にかけねなしで最もふさわしいものとして選ばれた相手である。この選択の強さから、この箇処で疲れが〈至福〉の表す観念の圏内にすっかり入っていたことが分る。従ってここに、単なるかき乱されない安らかさだけでなく、冬宵長きを楽しみ日高くして起きる懶惰をむしろ愛する気分をも看取しなければならない。次に、双声〔sp〕で音的に強調された後者との結びつきによって、眠っている時のようにかき乱されないというニュアンスを確認できる。

「語彙のニュアンスの同化させる力⁽⁶⁾」は相互的にはたらく。「強いトーンを持った語⁽⁷⁾」 блаженный 「によってもたらされるトーン」は例1において観念圏内の語を呼出すだけでなく、「主題の傾向もあらかじめ決定する。」（もちろん「主題の傾向」の側からも〈至福〉を決定する力がはたらく）一方、観念圏内の語句は、観念の中心をなす語のどのニュアンスが優勢であるかをはっきりさせ、語義の特徴を詳しくする。

次の例で起こっていることもこれに等しい。

- 2) Или над Летой усыпленный
 Поэт, бесчувствием блаженный,
Уж не смущается ничем,
 И мир ему закрыт и нем?.. (7-11, 5~8)

かつて決闘で死んだレンスキを作者が思いやっている。ここでも押韻された усыпленный をはじめ、бесчувствием/уж не смущается ничем/нем が例1と同様にはたらかつはたらきかけられている。⁽⁸⁾

なお、これらのうち無感覚と無言がユローディヴィの行動⁽⁹⁾であることもおもしろい。なぜならユローディヴィはまさしく блаженный の第二の語義だから。辞書における語義の分類などにかかわりなく、語は、当面優勢な語義の特徴の他にも常にすべての語義を隠し持ち、テキストの中で不意にどれかをはたらかせる。

では第二の語義をめぐる。この語義の特徴が最も多くはたらかされている例。

- 3) Блажен, кто с нею [тревогой любви] сочетал
Горячку рифм: он тем удвоил
 Поэзии священный бред,
 Петрарке шествуя вослед,
 А муки сердца успокоил,
 Поймал и славу между тем;
 Но я Пушкин, любя, был глуп и нем. (1-58, 8~14)

例3で述べられる幸福者は、常識的論理からはずれた行いをなして外面的苦しみを蒙ることにより、かえって高い栄光を得て内面的苦しみを免れる点で、強くユローディヴィを

思わせる。ここで、語句「горячку/священный/бред/муки/глуп/нем」が「блажен」と影響しあう。「блажен」という「場所」で「さいわいな」という表層の意味と深層に隠されたユローディヴィの観念が「交差」し、その深層が「主題の傾向」を決定し関連する語句を呼び出す一方、逆に、ちりばめられた語句が「主題の傾向」を体現し隠された観念に気づかせる。これらの語句は「блажен」と共に再び作品中に現れる。⁽¹⁰⁾

- 4) Он[Ленский] верил, <...
...>
Что есть избранные судьбами,
Людей священные друзья;
Что их бессмертная семья
Неотразимыми лучами
Когда-нибудь нас озарит
И мир блаженством одарит. (2-8, 1...9~14)
- 5) И [Онегин] думал: глупо мне мешать
Его[Ленского] минутному блаженству;
И без меня пора придет;
Пускай покамест он живет
Да верит мира совершенству:
Простим горячке юных лет
И юный жар и юный бред. (2-15, 8~14)
- 6) Блажен, кто ведал их волненья
И наконец от них отстал;
Блаженней тот, кто их не знал,
Кто охлаждал любовь — разлукой,
Вражду — злословием; порой
Зевал с друзьями и с женой,
Ревнивой не тревожась мукой, <...> (2-17, 6~12)
- 7) Но я[Онегин] не создан для блаженства;
Ему чужда душа моя;
Напрасны ваши[Татьяны] совершенства:
Их вовсе недостойн я.
Поверьте (совесть в том порукой),
Супружество нам будет мукой, <...> (4-14, 1~6)
- 8) <...>, понимать
Душой все ваше Татьяна совершенство,
Пред вами в муках замирать,
Бледнеть и гаснуть... вот блаженство

さて、呼び出された観念圏内の語句は、どのようにテキストに入り込んでいるのだろうか。

例3に戻って。「さいわいなる者」について述べられた部分と "но" によってもはっきり対立させられた、さいわいならざる者＝「私」について述べられた行に、глупとнемが出現している。すなわち情報の切れめは〈至福〉の影響力行使の障壁になっていない。これは情報と観念が別の「体系」であることによって説明がつく。複数の体系が層をなしてテキストを形作っているのである。

この例では、блажен 以外に Петрарке も「強いトーン」を持つ。ロシア独特の存在であるユーロディヴィをめぐる観念と、全く西欧的な観念を呼び出しうるトーンが混在している点が興味をひく。このレベルでも複数の体系が層をなしているのだが、イタリア・ルネサンス詩人も〈至福〉にかき消され、「主題の傾向」を決定していない。⁽¹¹⁾

例4にはもっと多くの層が見られる。ひとつには革命願望も読み取りうる。⁽¹²⁾ またゲッテンゲン仕込みのレンスキイの声も聞こえる。ナポコフはキューヘリベケルが詩人の神話的起源について書いたシラー風の詩に言及したものであるとする。⁽¹³⁾ チジェフスキイはレンスキイを政治社会上のユートピアンとして描いてしまった、小説の他の箇處と矛盾する部分ととらえる。⁽¹⁴⁾ そして〈至福〉の表す観念も加わり、(もっとも相対的にその影響力は低下し、この блаженством はむしろ他の層によって呼び出されている面が大きい⁽¹⁵⁾) 互いに「交差」している。

例5、例7、例8でもさまざまな層が交差しているが、特に押韻 блаженств- — со-вершенств- が блаженный と утомленный(例1)、усыпленный(例2)の場合より複雑なはたらき方をしていることを指摘したい。この押韻は当時習慣化していた。⁽¹⁶⁾ それにもかかわらず、陳腐な押韻に皮肉をもって対しているプーシキンが、⁽¹⁷⁾ 作品中で三度この押韻を用いている。-ёнство 韻の語はさして少なくなく、⁽¹⁸⁾ -ённый とは比べものにならないにせよ、選択が特に制限されたとは思えない。そこで、プーシキンが少なくともこの組合せを拒んでいなかったことや、これらにおいて複数の層が交差し、他の層が組合せの陳腐さをうち消すほど優勢であることが考えられる。おそらく二番めの推測が遙かに本質的な理由であろう。じっさい、例5ではレンスキイのドイツ哲学かぶれの表現に“世界の完全性”ということばが不可欠であり、例7、例8では、タチヤーナの“完全さ”を中心に形作られる、“苦しみ”を伴った“幸福”という構図が共にオネーギンの発話として語られ、この余計者の形象表現にやはり必須である。

語の表す観念は、自らの前であると後ろであるとを問わず周囲のテキストにはたらきかける。トゥイニャーノフはテキストに語が出現した順番にあくまで従い、頑固に一方の分析態度を守った。韻についても、第一成分から第二成分への影響のみを述べた。⁽¹⁹⁾ しかし例1、例2、例4、例5、例8では観念を代表する語より前にも観念圏内の語が呼び出されており、例7と例8では同じ組合せの韻の第一成分と第二成分が同じ構図の下に順番をいれかえている。すなわち、観念の作用はその観念を代表する語の後だけでなく前にも及ぶのである。

語の表す観念は、その語の持つ語義の特徴すべての統一体である。「オネーギン」中にユーロディヴィは全く登場しないのに、〈至福〉という観念はユーロディヴィの特徴を色濃くしみこませられており、テキストにユーロディヴィの層をすべりこませる。

このような〈至福〉がプーシキン特有の観念なのか、当時通有された観念なのかは、本稿の扱う範囲を超える。本稿の目的は語の表す観念がテキストにどのように入り込んでいるかを見ることだから。また、語を発し観念を表出しテキストを作り出す作者自身もまた多層構造の存在であるという考えがいくら魅力的でも、ここで見た素材だけではそれを証明できないから。

語は「諸条件」からのほたらきかけを待つ「うつわ」であるとともに、必ずある観念を代表するものでもある。この観念は層をなして前後を問わず周囲のテキストに入り込み、他の語の「うつわ」を満たす。トーンの強い語ほどこの作用が強い。〈至福〉を代表する二語は、その典型だった。

〈註〉

- (1) トゥイニャーノフ、水野忠夫+大西祥子訳「詩的言語とは何か」せりか書房、p.73
- (2) 同 p.94
- (3) блаженный がなぜ、いつから、どのようにしてユローディヴィを表すようになったのか、寡聞にして知らない。管見に入った限りでいささか関係あると思われるのは、コヴァレフスキイが次のように述べている箇処である：「復活という至福の願いのゆえに、満足と霊的愉悅の中で、喜びとよろこびをもって、キリスト教徒としての徳以上に高いとされるものをなしとげる恵みを授かった者は、たゆみなく覚悟する、あるいはよりよく言うなら己にとって待望久しいものとする、裸形と飢えにおること、神のためにあらゆる苦難を忍ぶこと、憎しみ、辱かしめ、邪教徒よばわり、鞭打を蒙ること、この世のごみの如くなること、そして最後に、十字架に磔にされること、己の身にあらゆる瘋癲の行をひきうけることを。なんとなれば、キリスト教徒の栄光、富となぐさめ、宝、賛辞はキリストの苦しみであるから。」そして「マタイによる福音書」5章11、12を、根拠となる神自身のことばとして引用している：「わたしのために人々があなたがたをののしり、また迫害し、あなたがたに対し偽って様々の悪口を言う時には、あなたがたは、さいわいである。喜び、よろこべ、天においてあなたがたの受ける報いは大きい。」
(下線藤田) (И.Ковалевский, Юродство о Христе и Христа ради юродстве восточной и русской церкви, М., 1895, с.28)
- (4) Невозмутимо счастливый, исполненный блаженства
- (5) 以下引用文中〔 〕内および下線藤田。引用は次による。
А.С.Пушкин, Стихотворения.Евгений Онегин, Киев, изд.Веселка, 1986.
- (6) トゥイニャーノフ、p.160
- (7) 同 p.162
- (8) ゆえにチジェフスキイが бесчувствием блаженный をアンチテーゼの形容句と呼ん

でいるのはいかがであろうか。(Čiževsky, Evgenij Onegin, Harvard Uni. Press · Cambridge, 1967, p. 275)

(9) パンチェンコ「見世物としての笑い」(リハチョフ他, 中村喜和・中沢敦夫訳「中世ロシアの笑い」平凡社所収)参照。

(10) немойは例2で見た。また次の引用中の ослепительнойは例4の неотразимым лучамиに連なり, волшебнойもまた例3に直接続く詩連(次に掲げる二番目の引用)に現れていた。(プーシキンにとって詩連の切れめは叙述の絶対的切れめではない。「オネーギン」中でひとつのセリフがしばしば次の連に続き, 3-38・39ではひとつの文までも次の連にまたがる。情報でさえこの通りである。まして後に述べるように情報と異なる層である観念の影響力行使の障壁にはますますなりにくい。)

§ Ты Татьяна в ослепительной надежде
Блаженства темное зовешь,
Ты негу жизни узнаешь,
Ты пьешь волшебный яд желаний, (3-15, 6~9)

§ Свободен, вновь ищу союза
Волшебных звуков, чувств и дум; (1-59, 3~4)

(11) 「～なる者はさいわいなり」という言い方について補足を二点。第一に, この言い方に聖書的含意もしくはそれに対する皮肉を見すぎてはならない。確かに「マタイによる福音書」五章の列举は聖書の中で最も有名な部分のひとつであり, 聖書的含意もこの言い方は持つ。しかし, 一方, 古代ローマ詩以来の伝統も持ち(Nabokov, Eugene Onegin in 4 v., Princeton Uni. Press, 1975, vol. 2, p. 213), すなわち非キリスト教的な用いられ方の伝統も持ち, またロシアにおいてもプーシキン以前にも用いられて(たとえば「知恵の悲しみ」一幕七場, チャーツキイの台詞 "Блажен, кто верит, тепло ему на свете."), 敬虔な感情はすりへり, 特別でない言いまわしになっていたはずである。第二に, この言い方は「オネーギン」の中に例3, 例6を含めて六度出現しており(4-34, 4-51, 8-10, 8-51), プーシキンのお気に入りだったらしい。そしてそれらがすべて作者のことばの部分に出現していることや, 章末に多く出現していること(一, 四, 八章。八章末とは作品末でもある), 一息の叙述をまとめるような結論, 感慨を言う時に用いられていること, 必ずさいわいなる者にひきかえプーシキン自身が我身の不幸を託つことばがついていることも特色になっている。

(12) 初期の版では10~14行が伏せられた。検閲を恐れたのだとも推測されるが, この説は全く人気がない。

(13) Nabokov, vol. 2, p. 234

(14) Čiževsky, p. 225

(15) 1-12の блаженныеには触れなかったが, これは“おめでたい, 愚かな”という語義の二次的特徴が圧倒的な例で, テキストに対する影響力はあまり持っていない。

(16) ヴァーゼムスキイが「блаженствоの後には совершенствоが必ず続く」と書いている。

(Čiževsky, p. 253)

(17) 参照

§ И вот уже трещат морозы
И серебрятся среди полей...
(Читатель ждет уж рифмы розы;
На вот возьми ее скорей!)

§ Мечты, мечты! где ваша сладость?
Где, вечная к ней рифма, младость?

(18) Обратный словарь рус. языка, изд. советская
れば25語, Зализняк, Грамматический словарь рус
19語。

(19) トウイニャーノフ, p. p. 180~197